



TITLE:

日埃貿易の調整について

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 日埃貿易の調整について. 經濟論叢 1935, 41(4): 499-528

ISSUE DATE:

1935-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130641>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十四卷 第四號

昭和十年十一月一日發行

論叢

限界生産力説の二形態……………文學博士 高田保馬
地方税としての營業税……………法學博士 神戸正雄
肥料配給統制と産業組合……………經濟學博士 八木芳之助

時論

日埃貿易の整調について……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

工業に於ける經營所在地の選定に就いて……………經濟學士 大塚一朗
日本に於ける金爲替本位制の濫觴……………經濟學士 松岡孝兒
萬民經濟學と國民經濟學……………經濟學士 白杉庄一郎

說苑

農山漁村財政の標準形態……………經濟學博士 汐見三郎
出生率の減退と失業問題……………經濟學士 三谷道麿

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

時 論

日埃貿易の調整について

谷 口 吉 彦

目次

- 一、問題の發生
- 二、經過期間における諸問題
- 三、貿易調整と工業保護
- 四、日埃貿易の發展
- 五、埃及貿易の檢討
- 六、日埃貿易の内容
- 七、英埃經濟の提携
- 八、問題解決の試案

一、問題の發生

昭和十年七月十八日埃及政府は突如として、わが政府に對し日埃通商協定の廢棄を通告して來た。即ち昭和五年（一九三〇）三月以來、兩國の間に成立してゐた『日埃通商關係に關する公文』は三ヶ月後の昭和十年十月十八日をもつて、失効となるべき旨の通告である。いまこの廢棄通告の要旨を引用すれば次の如くである。

『一九三〇年の協定以來、日埃間は片貿易にして、また國內工業は日本品の競争のため危機に瀕し居るにつき、埃及は最惠國待遇を保證する右協定を廢す。依つて協定は十月十八日終止す。

『尤も埃及は友好關係保持の爲め、國產保護を基礎とする新協定の締結を考慮するを辭せず。新協定の締結までの間、埃及政府は日本品の輸入額が過去三箇年の當該期間の平均輸入額を超過せざることを希望す。これ埃及政府が國內工業の存在を擁

護する目的を以て、特別な關稅措置を執るの餘儀なきに至ることなからしむる爲なり。』¹⁾

今この廢棄通告によつて、少くとも表面の理由とする所は、次の二點にあることが判る。

(一) 日埃間の片貿易の調整

(二) 埃及の工業保護の目的

即ちこの二目的のために、日本品の輸入を防遏せねばならぬが、それは現行協定の下では、その内容をなす所の最惠國約款に違反することとなるから、そこで先づその現行協定を破棄しておくといふわけである。

けれども右の廢棄通告の後半にもある如く、埃及政府も絶對的に無條約國たんとするものではなく、國內工業の保護と兩立しうる協定、即ち最惠國約款を認めず、また日本品の防遏を妨げざる程度の新協定ならば、之が締結を辭せざることと言ふまでもない。而してその新協定の成立までの間、または現協定の失效までの間に、當然に豫想せらるゝ見越輸出に對しては、過去三箇年の實績の程度に止むべきやう吾國の自制を希望し、若しこの自制の行はれざる場合には、或は關稅の引上げ措置をとるに至るべきことを暗示してゐる。

然るに果して九月二十日に至り、そこに暗示されてゐた關稅引上げが實現されることとなつた。即ち綿布・綿メリヤス・綿絲・人絹布・人絹メリヤス・綿ビロード・綿ブラッシュ・綿製衣服・人絹製衣服・その他の衣服既製品に對して、從價四〇%の關稅(爲替補償稅)を追課するに至つた。た

1) 大日本紡績聯合會月報，第五百十五號(昭和十年八月號) p. 3.

この關稅は、右の品目の總ての輸入に追課せられるのか、或はまた過去三箇年平均に對する超過量に追課せられるのか、報道はまち／＼であつてまだ明らかではないが、何れにせよ、すでに最初の通告にも伏線を張つてゐる如く、見越輸入を口實に、差當つて邦品を防遏せんとする非常手段であつて、或はすでに最初から計畫されてゐた所であるとも考へられる。

そこで近く開かるべき日埃會商は、極めて複雑な困難な多くの問題に逢着することゝなつた。

第一に、當面の問題として十月十八日の失效または新協定の成立に至るまでの間、この間の經過期間を如何に處置すべきか、差當つては今次の四割關稅を如何に處置すべきかの問題、

第二に、更に根本的には、新協定により日埃貿易の協定的統制を行はんとする場合には、そこに如何なる諸問題が伏在するか、

以下これらの諸問題に對して多少の參考ともなるべき資料を供する意味において、忌憚なき鄙見を述べることにする。

二、經過期間における諸問題

七月十八日より十月十八日に至る三箇月の經過期間に對する埃及側の要求は、過去三箇年の當該期間における平均輸入量を超過せぬやう、吾國の自制を望むと言ふにあつた。

この希望は實質上の輸出制限を實現せしめんとするものであるが、之に對しては二つの問題が発生する。一は斯くの如き輸出制限の希望は、日埃間の國際法上から見て何を意味するかの問題

二は事實上の問題として、斯くの如き輸出制限は果して可能であるか否かの問題これである。

第一に、輸出または輸入數量の制限が、日埃通商協定の最惠國約款に違反するか否かは、その制限の内容如何に係る。過去三箇年の平均數量を基準とするならば、比較的に合理的の如く見えるが、併しこの三箇年における増加傾向が、日埃貿易におけるが如く、特に顯著なる場合には、その趨勢値を考慮するでなければ、約款違反の責を免がれ得ない¹⁾。埃及側もまた恐らくこのことを知るが故に、自ら積極的に輸入制限を行ふことなく、吾國の自制を單に希望するに止めたものと思はれる。即ち吾國の道德的支持または紳士の自制を希望したのであるが、然らば埃及側に之を希望するだけの用意はあつたか、別言せば協定廢棄の通告は、果して紳士の態度において行はれたか、この點において埃及政府の態度は、わが國民の等しく遺憾とする所である。之を最も簡明に表明するものは、日本經濟聯盟および日本商工會議所よりカイロおよびアレキサンドリヤ商業會議所宛に發送された次の一文であらう。

『過去八年間、貴國の對日貿易は入超を續けたるに鑑み、最近本邦綿業關係諸團體は、右の如き日埃貿易の不均衡を改善するため、日本當業者に埃及棉の買入増加を熱心に慫慂したる結果、本年上半期における兩國の貿易尻は、日本側の入超六百二十萬圓なるを示すに至れり。』

『然るに右の如き日本側における友好精神をも無視して、今回貴國政府が何等の豫備交渉を用ひず、突如として日埃通商條約廢棄の舉に出でられたるは、兩國間における將來の通商關係の圓滿なる進展上、甚だ遺憾に堪へざる所なり云々』²⁾

即ち吾國の終始淪らざる友好的態度に拘らず、突如として何等の豫備交渉もなく、協定廢棄を

1) 拙著、『貿易統制の研究』第一篇第九章、輸入割當制と最惠國約款との關係、p. 226.

2) 大日本紡績聯合會月報、前掲號、p. 3—4.

通告し来るが如き非紳士的態度を採りながら、吾國に向つてのみ、紳士的態度をもつて實害を伴ふ輸出制限を自制せしめんとするが如きは、何としても公正なる處置とは言ひ得ない。

然らば第二に、かりに吾國がこの點を忍んで、輸出制限を自制的に行はんとしても、事實上の問題として、しかく急速に實現されうるものではない。この點において埃及側が餘りにも突如として、青天の霹靂然として協定廢棄を通告し來つたことにも責任がある。蓋し吾國において自制的に輸出制限を行はんとせば、何よりも先づ對埃及輸出組合を結成せねばならず、更に過去の實績による各人への割當をも行はねばならぬ。これらの準備のためには、少くとも數箇月の時日を必要とするからである。そこで吾が當業者では、差當つて非公式にはあるが、既約定品の無制限通關を要求したが、埃及側は之に應ぜず、荏苒として時日を経過する間に、遂に今回の四割關稅を見るに至つたものである。いま埃及における過去三箇年の當該期間の對日綿布輸入數量は第一表の如くである。

第一表 過去三ヶ年平均
日本より埃及への綿布輸入量額(當該各月)

| 一九三二年 | 七 月 | | 八 月 | | 九 月 | | 十 月 | |
|-------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|
| | 數 | 價 | 數 | 價 | 數 | 價 | 數 | 價 |
| | 量 | 額 | 量 | 額 | 量 | 額 | 量 | 額 |
| | 平方米 | 埃及磅 | 平方米 | 埃及磅 | 平方米 | 埃及磅 | 平方米 | 埃及磅 |
| | 六、六〇七、六六二 | 九一、九三五 | 五、七四四、六〇五 | 七九、五九七 | 八、三三二、二六六 | 二六、五三二 | 八、八三五、一七二 | 二六、三三三 |

3) 日埃貿易協會調(前掲雜誌, p. 9—10)に據り算出す。

| 平 均 | 一九三三年 | 一九三四年 |
|------------|-----------|------------|
| 八、三九七、六〇〇 | 三三、七六三 | 八、六四〇、四八三 |
| 二〇、八六九、六八八 | 一五、三三五 | 二一、二四〇、六〇五 |
| 八、五八四、七〇〇 | 三九、六六七 | 八、五〇〇、三三三 |
| 二〇、七六六 | 八、四三二、六八三 | 二一、九六六 |
| 二〇、七九、二五九 | 三三、二二〇 | 二一、七九、二五九 |
| 二一、六二六 | 二六、二一六 | 二一、六二六 |
| 九、三三〇、六三三 | 二、四九六、八〇六 | 二、四九六、八〇六 |
| 三三、五八六 | 九、七二一、三三八 | 一五、〇六一 |
| 一〇、三三三、四三三 | 一四八、四四四 | 一五、〇六一 |

埃及政府が九月二十日より實施するに至つた四割關稅の追加は、明らかに日埃通商協定に含まるゝ最惠國約款に違反するものである。この通商協定は埃及が關稅自主權を獲得した昭和五年（一九三〇）三月、埃及國外務大臣ガリ・バシア氏とわがアレキサンドリヤ總領事横山正幸氏との間に交換された一の公文書であつて、普通の通商條約とは異り、その内容の全部が最惠國約款に關するものである。別言せばこの日埃通商協定は、たゞ最惠國約款のためにのみ締結されたものである。その主要な内容を左に引用する。

『埃及國政府が、埃及國に輸入せらるゝ日本國の生産および製造に係る一切の產品に對し、右產品が消費に向けらるゝと、再輸出または通過に向けらるゝとを問はず、最惠國待遇を適用すべきことに同意する。……當分の内右待遇は、埃及國と通商取極を有せざる國を経由して埃及國に輸入せらるゝ產品に對しても適用せらる。……』

『本制度は埃及國が「スーダン」の產品に對し許與する制度および兩締約國の一方が地方的協定に基き、或隣接國の產品に對し許與する制度を留保し、完全なる相互條件にて許與せらるゝ。……』

『本取極は貴官が本大臣に對し、貴國政府の同意を確認せらるゝと同時に實施せらるべく、且つ兩締約國の一方に依り三ヶ月の豫告を以て廢棄せらるゝことを得……』³⁾

之によれば三ヶ月の豫告をもつて廢棄を通告したことは、その非紳士的または非友好的態度を

道德的に難詰しうるに止まり、法律的には通商協定の規定上これを如何ともすることは出来ない。またかの輸出數量の制限も、最近三ヶ年の平均數量に趨勢値をさへ考慮すれば、たとひ之を一方的に強制的に實施したところで、たゞその非友好的態度を道德的に責めうるに過ぎず、約款違反の問題とはならない。況んや單に吾國の自制を希望し來れる場合には尙更である。然るに今回の四〇%追加關稅に至つては、たとひそれが過去三ヶ年平均に對する超過量に賦課されるものであつたとしても、明らかに協定違反である。何となれば、兩國間の通商協定には、前示の如く吾國から埃及への一切の輸出品に對して、完全なる相互條件の下に、最惠國待遇を與ふべきことを協定し、而かもこの協定は先方の如何なる恣意をもつてするも、十月十八日までは有效である。然るに吾國の商品に限りて、かくの如き高率の差別關稅を課することは、最惠國と同等の待遇はおろか、最惡國としての差別待遇を受けるからである。

これは單純なる非友好的または非紳士的といふが如き道德上の問題ではなく、法律上の違法問題である。取消または撤回を待つまでもなく、本來的に無效の行爲である。たゞ國際間の法律には強制または制裁の方法がないから、無效の行爲といへども、その實效を妨げることが出来ない。結局、實際問題としては、現にわが當局の試みつゝあるが如く、抗議を提出して撤回を迫るより外に方法はなく、これさへその實效は殆んど期待し得ない状態にある。それ故に今日當面の應急策としては、第一に現行協定の有効期間を十月十八日以後、適當の時期まで延長しおき、そ

の間に新協定の締結につき會商を進めるより外に方法はない。理論的には現行協定の存續する限り、四割關稅の追加は違法であるから、之を先づ撤回するでなければ、新協定の協議には入り得ないわけではあるが、實際問題としては、之は可なりに困難であるから、なるべく早く新協定を成立せしめて、その成立と同時に關稅を撤廢せしむることとなるであらう。そこで問題は根本的なその新協定に移る。

三、貿易調整と工業保護

埃及政府の理由とする所は、貿易調整と工業保護にあるが、工業保護については姑らく後の問題とし、また日埃貿易の數字については後に検討することとし、假りに日埃貿易が著しき片貿易にあるとするも、之を理由として協定廢棄を通告することは、理論的に成り立ち得ない。何故かと言ふに、片貿易の調整には、積極的調整と消極的調整の二方法があり、埃及側の立場においては、何よりも先づ積極的の調整方法を探らねばならぬ。即ち吾國からの輸入を制限するよりも、先づ埃及からの輸出を増進することによつて、片貿易の調整を計らねばならぬ。

それ故に理論的には、廢棄通告に先だちてまづ埃及側から、吾國の輸入増加を要求する提議がなければならず、その交渉の失敗する場合において、始めて吾國からの輸入制限を計畫し、その必要なる前提として、或は廢棄通告ともなるであらう。尤も埃及政府も一昨年以來、吾國の棉花輸入の増加を希望し、吾國もまた銳意その輸入増加を計つた爲め、最近では片貿易は次第に調整

せられて、本年の上半期の如きは、後に詳論する如く却つて吾國の入超を示してゐる。この最近の傾向よりせば、貿易調整の理由の如きは、全く事實上に否定せらるゝのみならず、假りに多少の不均衡が残存したとしても、直ちに協定廢棄の通告に移ることは、理論的にも實踐的にも、明らかなる飛躍である。

この點に關して尙ほ重要な一つの事實は、埃及全體の貿易狀態である。今もし埃及國が全體として著しき入超國であつて、全體としての片貿易を調整する必要があるならば、吾國との片貿易もまた重要な問題となるであらう。然るに事實は反對に、埃及國は全體として、最近では著しい出超國に轉じてゐる。左に最近五年間の埃及貿易統計を示す。

第二表 最近の埃及貿易統計²⁾

| 年次 | 輸入總額 | 輸出總額 | 差額 | 輸入を100とする輸出 |
|-------|----------------|----------------|----------------|-------------|
| 一九三〇年 | 千埃及磅 四七、一六七 | 千埃及磅 三二、九六一 | (入超) 一五、二六六 | 六・七% |
| 一九三一年 | 三、五八 | 二六、〇七四 | (入超) 三、四四 | 八・〇% |
| 一九三二年 | 二七、六二 | 二五、二六七 | (入超) 一、九四 | 七・七% |
| 一九三三年 | 二六、五八 | 二六、一〇三 | (出超) 一、三四 | 一〇・〇% |
| 一九三四年 | 二九、三三 | 三一、〇五 | (出超) 一、八〇 | 一六・三% |

今もし埃及國が最近非常な入超國となり、そのために國際貸借が悪化し、通貨および財政狀態が危殆に頻するといふが如き場合ならば、或は吾國との多少の片貿易でも、埃及にとつては或は

2) 埃及大藏省統計局 (1933年迄は三菱經濟研究所, 世界經濟の現勢 p. 604に據り. 1934年は大日本紡績聯合會月報, 515號, p. 6 に據る)

重要な問題となるであらう。然るに事實は斯くの如く、最近では入超から出超に轉じて、國際貸借上からも通貨安定上からも貿易調整の必要は少しも認められない。若しも最近出超貿易をつゞけつゝある埃及國が、貿易調整を名として通商協定を廢棄するとすれば、年々入超貿易を續けつゝある吾國の如きは、そも／＼何をなすべきであらうか。

もと／＼貿易調整は、たゞ徒らに貿易を調整せんとするものではなく、何等かの他の目的を達する手段としてのみ行はるゝものである。³⁾最も多くの場合には、輸出促進の目的に利用せられる。即ち入超國が入超先の相手國に對して輸入を強制し、自國の輸出を輸入の程度にまで引上げんとするものである。けれども埃及が吾國との片貿易を調整せんとするのは、その對日輸出を促進せんためではない。協定廢棄を通告して、貿易促進を夢みるが如きは、あり得ないからである。即ちこの意味では、貿易調整を理由に協定廢棄を通告するが如きは、そのこと自體が自己矛盾の甚だしきものである。

それ故に埃及の理由とする片貿易の調整とは、實は片貿易の調整ではなくて、目的は輸入の制限にあり、邦品の防遏にある。邦品の進出を防遏するために、その障害となる現行協定を破棄せんとするに外ならぬ。

然らば邦品防遏の目的は何處にあるか、國內工業の保護といふ第二の理由これである。そこで最も重要な問題は、邦品の進出が果してどの程度に、埃及國內の工業を壓迫しつゝあるかにあ

3) 拙著、貿易統制の研究, p, 237.

る。吾國からの主要輸出品は、後に詳論するが如く、綿布・人絹織物・絹織物・メリヤス製品等であるが、これらが果して埃及國內の同種産業を壓迫しつゝあるか。

先づ一般的に見て、埃及國は有名な農業國であつて、全人口の六割乃至七割は農業に従事してゐる。之に反して工業は今なほ甚だしく微弱であつて、漸く全人口の一割を占むるに過ぎない。政府の政策としても、農業政策が中心となり、從來も政府は屢々國內工業の保護を口にするも、それは主として關稅引上げの口實に過ぎず、工業は埃及國の特殊事情から多くの期待をかけることは出来ない。即ち棉花その他の原料品はあつても、鐵ことに石炭の如き重量品を國內に産せずことに低廉にして優秀な勞働力が豊富でないからである。埃及國としてはその豐饒な自然條件を利用して、どこまでも農業國として發展すべきであり、また發展しつゝあるわけである。

具體的に見ても、吾國からの輸出品が埃及の國內工業を壓迫しつゝありとは、殆んど考へられない。なるほど綿布工業は多少は起りつゝあるけれども、それは國內需要の一部分を充たしうるに止らず、大部分は輸入に俟たねばならぬから、假りに日本綿布の輸出を絶つたとしても、それだけは他の外國から輸入せねばならぬ。また吾が商品のために國內産業が危殆に頻してゐるとも考へられない。ミスル紡織會社でもナシヨナル紡績會社でも、六分乃至七分五厘の配當をして株價暴騰の勢にあると報ぜられてゐる¹⁾。

之を要するに、埃及國が協定廢棄の理由とする貿易調整も工業保護も、理論的には何ら重要な

理由となり得ざるものである。こゝに至つてわれ／＼は、眞實の理由は寧ろ他に存するでないかを疑ふものであるが、それは姑らく後の問題として、何れにせよ現實の問題としては、協定廢棄はすでに通告されてゐるのであるから、その理由の何たるを問はず、之に對する對策を考究することは、目前焦眉の緊急問題となるわけである。

四、日埃貿易の發展

日埃會商の目標は、兩國の間に何等から貿易協定を成立せしむるにあること勿論であるが、然らばその貿易協定は、如何なる性質のものか、具體的には、關稅に關する規定か、數量に關する規定か、或はまた關稅と數量の兩規定を含む場合でも、その何れがより重要な内容をなすであらうか、例へばかの日印協定は、關稅規定をも含むけれども、その重要な内容は寧ろ貿易數量上の規定にある。

一部の論者に從へば、吾國の立場から見て、數量規定よりも寧ろ關稅規定を有利とし、極端には總てを先方のなすがまゝに放任して、高率關稅を甘受する方が、數量制限を新協定によつて取りきめるよりも、吾國にとり有利であると言ふ。なるほど關稅ならば、如何に高率であつても、何等かの方法によつて之を越えることは、全く不可能ではない。之に反して、輸入數量を一定される場合には、如何なる方法を講ずるもそれ以上を入れることは殆んど不可能である。従つて吾國より見れば、關稅による壓迫の方が寧ろ忍び易い様に思はれるが、併し之は甚だ皮相な觀察で

第三表 日埃貿易の發展¹⁾

| | 埃及へ 輸出 | 埃及より 輸入 | 差 額 | 輸 入 100 を す 出 る 輸 |
|-----------|-----------|------------|---------|-------------------------------------|
| | 千円 | 千円 | 千円 | % |
| 明治31 | 116 | 356 | -240 | 32.6 |
| 32 | 661 | 939 | -278 | 70.4 |
| 33 | 278 | 1,468 | -1,190 | 18.9 |
| 34 | 308 | 1,890 | -1,582 | 16.3 |
| 35 | 449 | 2,418 | -1,969 | 18.6 |
| 36 | 323 | 2,402 | -2,079 | 13.4 |
| 37 | 419 | 2,476 | -2,057 | 16.9 |
| 38 | 284 | 2,999 | -2,715 | 9.5 |
| 39 | 379 | 1,670 | -1,291 | 22.7 |
| 40 | 386 | 3,457 | -3,071 | 11.2 |
| 41 | 616 | 5,073 | -4,457 | 12.1 |
| 42 | 841 | 5,464 | -4,623 | 15.4 |
| 43 | 807 | 4,192 | -3,385 | 19.2 |
| 44 | 688 | 5,502 | -4,814 | 12.5 |
| 45 | 884 | 6,390 | -5,506 | 13.8 |
| 大正 2 | 1,371 | 7,143 | -5,772 | 19.2 |
| 3 | 1,823 | 6,829 | -5,006 | 26.7 |
| 4 | 985 | 6,136 | -5,151 | 16.1 |
| 5 | 5,388 | 8,332 | -2,944 | 64.7 |
| 6 | 13,507 | 10,907 | -2,600 | 123.8 |
| 7 | 28,468 | 9,179 | 19,289 | 310.1 |
| 8 | 15,912 | 16,005 | -93 | 99.4 |
| 9 | 30,550 | 13,263 | 17,287 | 230.4 |
| 10 | 4,922 | 12,220 | -7,298 | 40.3 |
| 11 | 6,423 | 10,571 | -4,148 | 60.8 |
| 12 | 18,045 | 20,635 | -2,590 | 87.4 |
| 13 | 27,080 | 17,014 | 10,066 | 159.2 |
| 14 | 25,266 | 32,631 | -7,365 | 77.4 |
| 15 | 23,098 | 31,958 | -8,860 | 72.5 |
| 昭和 2 | 29,006 | 24,633 | 4,373 | 117.8 |
| 3 | 23,714 | 20,340 | 3,374 | 116.6 |
| 4 | 31,352 | 25,824 | 5,528 | 121.4 |
| 5 | 28,997 | 16,223 | 12,774 | 178.7 |
| 6 | 22,830 | 13,568 | 9,262 | 168.3 |
| 7 | 41,877 | 19,788 | 22,087 | 211.7 |
| 8 | 55,608 | 26,456 | 29,152 | 210.2 |
| 9 | 72,988 | 46,259 | 26,729 | 157.8 |
| 總計 | 516,649 | 442,610 | 74,039 | 116.7 |
| 最近 十年計 | 354,736 | 257,680 | 97,054 | 137.7 |
| 最近 五年計 | 222,300 | 122,294 | 100,006 | 181.8 |

ある。邦品防遏が主眼である以上は、その目的を達するまでは、あらゆる手段を採るであらうし異常に高率の關稅をもつても尙ほ效果なき場合には、結局は數量制限にまで進まねばならぬであらう。それ故に成立すべき新協定には、恐らく關稅の引下げその他の關稅規定を含むであらうけれども、その重要な内容は、現代的貿易協定の原則に従つて、恐らく數量上の協定となるであらう。即ち關稅協定よりも寧ろ數量協定への方向にあるものではないかと思はれる。

そこで數量協定への準備としては、何よりも先づ過去より現在に至る日埃貿易の發展ならびにその内容につき一應の事實を検討しておかねばならぬ。

1) 大藏省外國貿易月表に據る。

いま第三表について、明治三十一年より昭和九年に至る三十七年間の日埃貿易を見るに、この間に兩國の貿易は眼ざましき躍進を遂げ、輸出入の價額は數百倍の膨脹を示し、輸出總額五億一千六百萬圓、輸入總額四億四千二百萬圓に達してゐる。

それよりも重要な貿易差額について見るに、最初の二十年間は極端なる吾國の入超貿易であつたが、大正六、七年頃の世界戦争の影響を轉期として、吾國の出超に轉じて、中には著しき入超を示した年もあるが、大體においては出超傾向を續けてゐる。この點において日埃貿易は、世界戦争を境界として前後の二期に區分して、その特徴を見ることが出来る。前半期の入超傾向、後半期の出超傾向これである。それ故に全期間においては、比較的に均衡状態を示し、前述の如く五億一千萬圓の輸出に對する四億四千萬圓の輸入である。然るに最近十年間の總計では、三億五千萬圓の輸出に對し、二億五千萬圓の輸入を示して、可なりにも不均衡を示してゐる。

現行日埃協定の成立した昭和五年以後、昭和九年に至る五箇年について見るに、なるほど累年の出超を示して、殊に昭和七年・八年には、輸入の二倍以上を輸出してゐる。従つてこの五年間の統計では、二億二千萬圓の輸出に對し、一億二千萬圓を輸入して、出超一億圓に達してゐる。

併しながら最近では次第に出超緩和の傾向にあり、殊に昭和十年に入つては、第四表に示さるゝ如く、反對に一月以降未曾有の入超を示し、八月までの累計においては、ほぼ均衡を示して僅かに百萬圓程度の出超を示せるに過ぎない。これは後に述ぶるが如く、吾國の側における棉花買

| | | | | |
|------|------|-----|-----|------|
| 日 | 北 | ド | イ | フ |
| | 米 | | タ | ラ |
| | 合 | イ | リ | ン |
| | 衆 | ツ | ー | ス |
| 本 | 國 | | | |
| 三・四 | 一四・三 | 五・八 | 六・八 | 一二・四 |
| 三・〇 | 六・一 | 七・九 | 六・二 | 一四・四 |
| 四・八 | 二・五 | 九・一 | 六・〇 | 一二・八 |
| 四・八 | 四・九 | 九・八 | 八・一 | 一〇・三 |
| 五・〇 | 四・五 | 八・一 | 七・六 | 一二・五 |
| 三・二 | 五・〇 | 七・三 | 九・八 | 九・九 |
| 三・六 | 四・七 | 七・九 | 九・一 | 九・四 |
| 四・九 | 四・三 | 八・一 | 九・二 | 九・八 |
| 七・八 | 三・二 | 七・〇 | 八・九 | 七・二 |
| 一〇・七 | 三・二 | 七・六 | 七・八 | 七・一 |

吾國の貿易における埃及國の地位は更に低く、次の第六表によつて知らるゝ如く、埃及への輸出は總輸出の二%乃至三%、輸入は一%乃至二%を占むるに過ぎない。たゞ輸出入ともにその地位を向上せしめつゝあることは認められる。

それ故に日埃間の相互重要な程度より見る時は、日埃貿易の停頓によつて蒙る打撃の程度は、全體としては吾國よりも埃及において遙かに重大であることが判る。今日においてより、重要な輸出のみについて見るも、埃及は吾が輸出の三%（一九三三年）を占めるに反し、吾國は埃及の輸出の五%（一九三三年）を占めてゐるからである。

第六表 吾國の貿易における埃及國の地位₂₎

| 相手國 | 輸出總額に對する% | | | | | 輸入總額に對する% | | | | |
|------|-----------|-------|-------|-------|-------|-----------|-------|-------|-------|-------|
| | 一九二九年 | 一九三〇年 | 一九三一年 | 一九三二年 | 一九三三年 | 一九二九年 | 一九三〇年 | 一九三一年 | 一九三二年 | 一九三三年 |
| エヂプト | 一・五 | 二・〇 | 二・〇 | 三・〇 | 三・〇 | 一・三 | 一・〇 | 一・一 | 一・四 | 一・四 |

五、埃及貿易の檢討

日埃貿易の内容を檢討するに先だち、埃及國の貿易全體につき一應の檢討を試みる必要がある。蓋し貿易協定に限らず、一般に二國間の提携を成立せしむるためには、何よりも先づ相互に相手方の事情を理解する必要があるからである。國際經濟ことに國際貿易上の問題は、政治上の諸問題とは異り、相互によく相手方の事情と要求とを知つて、互に相手方の經濟的利益を侵さざる範圍において、自國の利益を確保しうる場合が多いし、またそれでなければ問題の解決を期することは恐らく困難であらう。

埃及が農業國であることは最も明確にその貿易上に現はれてゐる。即ちその輸出品の殆んど總ては農産物であり、輸入品の大部分は工産物である。而して農産輸出品のうちその七割乃至八割は棉花をもつて占め、玉葱・棉實粕・棉實・米これに次ぐ。即ち埃及の輸出貿易は、極端なる集中性を現はしてゐる。第七表上段に最近の輸出内容を表示する。

第七表 埃及の主要貿易品¹⁾

| 主要輸出品 | 一九二九年 | 一九三〇年 | 一九三一年 | 一九三二年 | 一九三三年 | 主要輸入品 | 一九二九年 | 一九三〇年 | 一九三一年 | 一九三二年 | 一九三三年 |
|-------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|--------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 |
| 棉花 | 四、三六二 八〇・〇 | 三、七六八 七四・五 | 一九六八八 七〇・二 | 一七、八六七 七二・七 | 二、三八〇 七六・二 | 綿絲布 | 七、二三八 二二・七 | 五、四七二 一六・六 | 三、四〇五 一〇・八 | 三、五三四 一一・九 | 三、五九九 一一・五 |
| 棉實 | 二、六二二 五二・一 | 一、八六五 五八・八 | 一、四三七 五・二 | 一、三三六 五・三 | 一、〇八八 三・九 | 鐵鋼及同製品 | 三、二二二 五・六 | 二、六九八 五・七 | 二、〇三三 六・四 | 一、五二〇 五・五 | 一、五九三 六・〇 |

1) 三菱經濟研究所、世界經濟の現勢、P. 605, 606, 607, 608に據る。

| 棉實粕 (千埃及磅 百分比) | 玉葱 (千埃及磅 百分比) | 米 (千埃及磅 百分比) | 化學肥料 (千埃及磅 百分比) | 石炭 (千埃及磅 百分比) | 建築用木材 (千埃及磅 百分比) |
|----------------------|---------------------|--------------------|-----------------------|---------------------|------------------------|
| 六・七 一・二 | 八・七 一・七 | 九・四 一・九 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |
| 九・七 二・八 | 四・〇 一・七 | 六・三 二・〇 | 二、四九 五・一 | 一、五九 三・二 | 一、八〇 四・〇 |
| 九・一 二・八 | 七・七 二・六 | 三・五 一・二 | 一、八〇 三・七 | 一、五九 三・二 | 一、八〇 四・〇 |
| 九・九 三・三 | 一、三六 五・〇 | 四・九 一・九 | 一、八〇 三・七 | 一、五九 三・二 | 一、八〇 四・〇 |
| 八・八 一・八 | 七・三 二・七 | 八・八 三・二 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |
| 八・八 三・三 | 七・三 二・七 | 八・八 三・二 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |
| 八・八 三・三 | 七・三 二・七 | 八・八 三・二 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |
| 八・八 三・三 | 七・三 二・七 | 八・八 三・二 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |
| 八・八 三・三 | 七・三 二・七 | 八・八 三・二 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |
| 八・八 三・三 | 七・三 二・七 | 八・八 三・二 | 二、四八 四・五 | 一、六九 三・〇 | 一、八〇 三・二 |

之に反して輸入は比較的分散性に富み、綿絲布の一割三分を筆頭に鐵鋼品・化學肥料・石炭・木材等を主要輸入品とする。第七表下段に最近の輸入内容を示す。

之によりて明らかなる如く、輸出品においては棉花が殆んど總ての問題であり、輸入品においては綿絲布ことに綿布が主要の問題である。然らばその棉花の輸出先および綿布の輸入先は如何、第八表は主要な棉花輸出先を示すものである。

第八表 埃及棉花輸出先¹⁾

| 輸 出 先 | 一九二八年 | 一九二九年 | 一九三〇年 | 一九三一年 | 一九三二年 | 一九三三年 | 一九三四年 |
|-----------------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| イギリス (千埃及磅 百分比) | 一七、五九 四・六 | 一四、〇七 三・九 | 五、五七 三・二 | 六、四九 三・三 | 五、五七 三・〇 | 八、五七 四・一 | 七、二二 二・九 |
| フランス (千埃及磅 百分比) | 六、〇四 一・五 | 五、八六 一・四 | 二、七六 一・四 | 二、四八 一・四 | 二、九二 一・三 | 三、〇五 一・四 | 二、八七 一・四 |
| ドイツ (千埃及磅 百分比) | 二、六〇 五・八 | 二、五九 六・三 | 一、六八 九・四 | 一、八八 九・二 | 二、二七 七・二 | 二、二〇 九・五 | 二、六三 七・〇 |

1) 1934年の統計は大日本紡績聯合會月報 515號・P. 6 に據り、その他は三菱經濟研究所、世界經濟の現勢P. 606に據る。

| イタリー | 日本 | 總計 (其他を含む) |
|-------------|-------------|---------------|
| 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 | 千埃及磅 百分比 |
| 三、五九 六・八 | 一、七二 三・九 | 四、五一 一・三八 |
| 二、九〇 七・〇 | 一、六九 四・一 | 四、一三 一・三六 |
| 一、三〇 七・〇 | 六・二 三・七 | 一、七九 一・八 |
| 一、三二 六・六 | 一、二二 六・一 | 一、九六 一・八 |
| 一、五三 八・五 | 一、〇七 六・〇 | 一、七八 一・七 |
| 一、六五 七・八 | 一、一六 五・五 | 二、一三 一・八〇 |
| 二、一九 八・八 | 二、五〇 一・一 | 二、四一 一・七 |

之によれば棉花の三割乃至四割はイギリスに向けられ、佛・獨・伊・日の四ヶ國はほど一割づつを輸入する。併しながら最近の傾向より見る時は、イギリスは著しく減退して、四割五分から二割九分に落ちてゐる。フランスも同じく漸落傾向にあり、ドイツ・イタリー・日本は増加傾向にあつて、ことに吾國の増進は著しく、四%弱から一〇%以上に躍進してゐる。即ち埃及より見る時は、イギリスは絶對額では最大の顧客であり、吾國はその三分の一程度ではあるが、相對的には最良の顧客である。

次に輸入品の隨一たる綿布の輸入先について見るに、こゝでもイギリスは壓倒的に優勢であつて、十年前には六、七割を占めつゝあつた。然るにイギリスのこの地位はそのうち急速に減退して、最近では二割以下に落ちてゐる。之に對して十年前には僅かに六%に過ぎなかつた吾國は、急速に進出して最近では七割近くを占めるの勢にある。即ち埃及綿布市場は、最近數年間に完全にイギリスの手から移つて、吾國の手に歸した。後に述ぶるが如く、こゝに重要な問題がひそむわけである。この傾向は第九表によつて明らかである。

第九表 埃及綿布輸入先¹⁾

| 輸 入 先 | 年 | 一九二五 | 一九二六 | 一九二七 | 一九二八 | 一九二九 | 一九三〇 | 一九三一 | 一九三二 | 一九三三 | 一九三四 |
|--------------------------------|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| イギリス 〔百萬方碼 百分比〕 | | 七二・九 | 一三三・二 | 一六七・二 | 一三三・一 | 一三九・五 | 一〇〇・三 | 四・七三 | 三八・四 | 二七・三 | 四・八 |
| イタリー 〔百萬方碼 百分比〕 | | 四九・一 | 三三・三 | 三九・三 | 四二・四 | 四七・七 | 四〇・四 | 三・四 | 三五・八 | 二六・二 | 二・三 |
| 日 本 〔百萬方碼 百分比〕 | | 一六・一 | 一九・九 | 三三・五 | 四二・二 | 五〇・九 | 五五・五 | 三・三 | 八・二 | 一三・九 | 一四・六 |
| 總計 (其他を含む) 〔百萬方碼 百分比〕 | | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 | 一〇〇・〇 |

六 日埃貿易の内容

日埃貿易の内容は、大體において埃及國の貿易狀態の縮圖を示してゐる。即ち埃及からの吾が輸入品のうち、その八割以上は棉花であつて、他に少額の燐礦石その他を有するに過ぎない。之に對して埃及への吾が輸出品は、綿布が六割以上を占め、人絹織物・絹織物・メリヤス製品等をもつて大部分を占めてゐる。是等は吾が輸出全體としても重要な輸出品ではあるが、併しその他の重要輸出品たとへば生絲の如きは、殆んど出てゐない。即ち日埃貿易は吾が貿易全體の狀態よりも、寧ろより多く埃及全體の貿易狀態を反映してゐる。このことは全體としての日埃貿易が、吾國のためよりも寧ろより多く埃及のために行はれ、吾國の利益よりも寧ろより多く埃及の利益

1) 大日本紡績聯合會月報, 515號, P 6-7.

を代表してゐることを實證するものであると言へる。まづ最近十年間の吾が輸入品を第十表として掲げる。

第十表 對埃及主要輸入品

| 輸入價額 (千円) | 輸入 對埃及輸入に 對する% | 棉花 | 輸入價額 (千円) | 輸入 對埃及輸入に 對する% | 燐礦石 |
|--------------|----------------------|-------|--------------|----------------------|-----|
| | | | | | |
| 一九二五年 | 三一、五四九 | 六・七 | 四八七 | 〇・二 | |
| 一九二六年 | 二六、六八三 | 八・七 | 二、三九八 | 七・五 | |
| 一九二七年 | 三二、七九八 | 八・五 | 三、一九六 | 八・九 | |
| 一九二八年 | 一七、七三三 | 七・二 | 二、〇四四 | 一〇・〇 | |
| 一九二九年 | 三三、一七二 | 八・五・九 | 三、〇〇三 | 一一・三 | |
| 一九三〇年 | 二二、五九二 | 七・六 | 三、一五三 | 一九・四 | |
| 一九三一年 | 二二、六九 | 八・五・六 | 一、三九二 | 一〇・三 | |
| 一九三二年 | 一五、三〇二 | 七・三 | 三、六六四 | 一八・〇 | |
| 一九三三年 | 一九、〇八五 | 七・一 | 五、九六二 | 三三・一 | |
| 一九三四年 | 三九、七八七 | 八・〇 | 四、七六七 | 一〇・四 | |

即ち埃及からの輸入品は、極端なる集中性を有して、棉花・燐礦石の二品をもつて九割五分までを占めてゐる。之に對して埃及への輸出品は、やゝ分散的ではあるが、併しその六割乃至七割までは綿布である。

第十一表 對埃及主要輸出品

| 輸出價額 (千円) | 輸出 對埃及輸出に 對する% | 綿布 | 輸出價額 (千円) | 輸出 對埃及輸出に 對する% | 綿布 |
|--------------|----------------------|-----|--------------|----------------------|----|
| | | | | | |
| 一九二五年 | 一四、一三二 | 五・九 | 二八、四三三 | 七四・三 | |
| 一九二六年 | 一八、四三三 | 七・〇 | 三三、二九九 | 七四・三 | |
| 一九二七年 | 三三、二九九 | 八・三 | 一七、六三八 | 七四・三 | |
| 一九二八年 | 一七、六三八 | 七・三 | 二四、四二〇 | 七四・八 | |
| 一九二九年 | 二四、四二〇 | 七・八 | 二〇、五三六 | 七〇・八 | |
| 一九三〇年 | 二〇、五三六 | 七・八 | 一四、九五七 | 六五・五 | |
| 一九三一年 | 一四、九五七 | 六・五 | 二七、〇三八 | 六四・六 | |
| 一九三二年 | 二七、〇三八 | 六・六 | 三八、五二 | 六四・〇 | |
| 一九三三年 | 三八、五二 | 六・〇 | 四六、八三 | 六四・三 | |
| 一九三四年 | 四六、八三 | 六・三 | | | |

| 人絹織物 | 輸出價額 (千円) | | 埃及輸出に 對する% | | 絹織物 | | 埃及輸出に 對する% | | メリヤス 製品 | | 埃及輸出に 對する% | |
|------|--------------|---------------|---------------|---------------|-------|---------------|---------------|---------------|------------|---------------|---------------|---------------|
| | 輸出價額 | 埃及輸出に 對する% | 輸出價額 | 埃及輸出に 對する% | 輸出價額 | 埃及輸出に 對する% | 輸出價額 | 埃及輸出に 對する% | 輸出價額 | 埃及輸出に 對する% | 輸出價額 | 埃及輸出に 對する% |
| | 八二 | 七六八 | 一、四三八 | 一、四七 | 二、一九三 | 二、九六 | 三、九五四 | 五、七三六 | 四、三三八 | 八、〇六 | | |
| | 三五 | 三・二 | 五・〇 | 六・一 | 七・〇 | 一〇・一 | 一七・三 | 三、四八 | 三、八七 | 三、〇〇 | | |
| | 二、四七 | 二、一八二 | 一、四七 | 二、一八二 | 二、一八二 | 二、一八二 | 二、一八二 | 二、一八二 | 二、一八二 | 二、一八二 | | |
| | 九・九 | 五・二 | 五・三 | 八・九 | 七・六 | 四・一 | 五・七 | 四・三 | 六・一 | 四・三 | | |

即ち日埃貿易は、大體において棉花と綿布との交換を中心とするものであることが判る。而してこの棉花と綿布の埃及國における地位は、前掲第八表および第九表に示さるゝ如く、最近は棉花において埃及總輸出の一〇%、綿布において埃及總輸入の六八%を占めてゐる。

然らばこの棉花と綿布は吾國において如何なる地位を占めてゐるか、周知の如く吾國の棉花輸入は米棉および印棉が大部分を占め、埃及棉は特殊高級品(ガス絲)の原料として、極めて少量の輸入を見るに過ぎない。之に比すれば綿布の地位は稍々重要である。最近の數量および價額より見たる棉花および綿布の地位を第十二表に示す。

之によれば埃及棉花は最近の最高において、數量の四・四%、價額の五・四%を占めるに過ぎない。而して數量上の地位に比して、價額上の地位の常に高いのは、言ふまでもなく埃及棉花の高

第十二表 對埃及棉花および綿布の吾國における地位⁽¹⁾

| 棉花輸入總量 | | | 埃及棉輸入量 | 對總量% | |
|--------|------------|-----|---------|------|-----|
| 1925 | 14 589 397 | 百封度 | 252 608 | 百封度 | 1.7 |
| 1926 | 15 527 589 | | 340 863 | | 2.2 |
| 1927 | 17 066 473 | | 317 843 | | 1.9 |
| 1928 | 13 020 231 | | 234 299 | | 1.8 |
| 1929 | 14 386 095 | | 311 428 | | 2.2 |
| 1930 | 12 764 211 | | 243 448 | | 1.9 |
| 1931 | 14 875 768 | | 382 892 | | 2.6 |
| 1932 | 16 986 875 | | 440 483 | | 2.6 |
| 1933 | 16 652 268 | | 373 939 | | 2.2 |
| 1934 | 18 064 912 | | 787 886 | | 4.4 |

| 棉花輸入總額 | | | 埃及輸入額 | 對總額% | |
|--------|---------|----|--------|------|-----|
| 1925 | 923 355 | 千円 | 31 549 | 千円 | 3.4 |
| 1926 | 725 930 | | 28 682 | | 4.0 |
| 1927 | 624 631 | | 21 798 | | 3.5 |
| 1928 | 549 942 | | 17 722 | | 3.2 |
| 1929 | 573 016 | | 22 171 | | 3.9 |
| 1930 | 362 047 | | 12 592 | | 3.5 |
| 1931 | 296 273 | | 11 619 | | 3.9 |
| 1932 | 447 401 | | 15 300 | | 3.4 |
| 1933 | 603 847 | | 19 084 | | 3.2 |
| 1934 | 731 425 | | 39 787 | | 5.4 |

| 綿布輸出總額 | | | 對埃及輸出額 | 對總額% | |
|--------|---------|----|--------|------|------|
| 1928 | 352 218 | 千円 | 17 638 | 千円 | 5.0 |
| 1929 | 412 707 | | 24 410 | | 5.9 |
| 1930 | 272 117 | | 20 526 | | 7.5 |
| 1931 | 198 732 | | 14 956 | | 7.5 |
| 1932 | 238 713 | | 27 069 | | 9.4 |
| 1933 | 333 215 | | 38 351 | | 10.0 |
| 1934 | 492 351 | | 46 834 | | 9.5 |

級かつ高價なることを示せるものである。然るに埃及に輸出する綿布の吾國における地位は、棉花に比すれば稍々高く、最近ではおよそ一〇%を占めてゐる。

別言せば吾國の綿布にとつて埃及市場を失ふことは、その全輸出の一〇%(第十二表)を失ふことを意味し、埃及の棉花にとつて吾國の市場を失ふことは、同じく一〇%(第八表)の損失である。また吾國の棉花にとつて埃及棉花を失ふことは、その全輸入の五%(第十二表)に過ぎないが、埃

1) 内外綿業年鑑, 昭和九年度.

及にとつて吾が綿布の輸入を失ふことは、その六八%を喪ふことである。従つてその影響には著しき相違を來さねばならぬ。

七、英埃經濟の提携

埃及政府の理由とする片貿易の調整も國內工業の保護も、實は一片の口實に過ぎないものであつて、何ら協定廢棄の理由とはなり得ないものである。最初に述ぶるが如く、片貿易の調整ならば、吾國の棉花輸入を強要すべきであり、全體として出超をつゞけつゝある埃及國としては、吾國との多少の入超の如きは、重要な問題ではなく、而かも吾國の努力によつて次第に均衡に近づきつゝあるからである。また國內工業も吾が商品の進出によつて何ら著しき打撃を蒙らざることは、吾が綿布の進出に拘らず、埃及の綿布輸入總量は却つて減退しつゝあることによつて明らかである。即ち吾が商品の進品は、それだけ他國の商品に取つて代つたに過ぎない。

かくして埃及政府の眞の理由は、全く他の方面にあることが明らかとなる。それは恐らく直接には、爲替關稅を追加せんための準備行爲であり、更にその爲替關稅は、吾が商品の進出によつて、次第に埃及市場から排除されつゝある第三國の利益擁護を意味すると信ぜしむるに足る十分の根據がある。それは埃及國とは政治的に最も密接な關係にある第三國であり、經濟的にも從來は最も密接な關係にあつたから、埃及政府がその國の利益擁護に専念することは、一應の理由があるかに見える。併しながら既に述べ來れる資料によつても明瞭なるが如く、その第三國の世界

的地位の動搖すると共に、埃及國との經濟關係もまた、最近急速に動搖しつつある。傳統の力によつて今なほ絶對的には優位を占めてはゐるが、相對的には既に明らかに敗退しつつある。埃及國がこの顯著な動向に注意せずして、その經濟政策を決定するが如きことありては、決してその國將來の發展を期しうる所以ではない。例へば第三國の往時の繁榮を追想して、埃及棉花の主要な市場を、その國にのみ頼らんとするが如きは、埃及の將來のために採るべき政策ではないと思はれる。

この點に關聯して、最近埃及より英國に派遣せられた遣英經濟使節が、埃及に歸來して發表せる報告書は、その内容と共に、その公表が恰かもかの對日廢棄通告の發せられた前日の七月十七日、カイロにおいて行はれたことを注意せねばならぬ。而かも埃及政府への復申は、それよりも遙かに早く、また遙かに詳細な内容をもつて、すでに六月五日に行はれてゐる。¹⁾それらの中には明らかに對日廢棄通告の勸告を含み、更に驚くべきことにはその公表よりも二箇月以上おくれで現はれた九月二十日の爲替補償税までも、すでにその中に勸告されてゐる。左にその公表文書につき關係部分を引用する。²⁾

『七月十七日埃及國首府カイロにおいて公表せられたる埃及遣英經濟使節報告書』

一、英國の埃及棉消費量は相當減退したが、依然として同國は埃及棉消費國として第一位を占めて居る。尤も英國の埃及棉消費量減少は、世界的に見たる工業景氣の移動により、他の諸國の消費増加に依つて埋合せがついてゐる。……

二、將來埃及棉の消費減退を危懼せしむる主要な悲觀材料は、價格低廉な人絹工業の發達及び埃及棉と競争し得る新種棉花

1) 外務省通報局日報, 第192號, (昭和十年八月二十六日)
2) 大日本紡績聯合會月報, 第515號, P12—14.

の發見又は既存優良棉花の生産激増である。中略

四、埃及棉の全販路を維持することは絶対に必要であるが、就中英國は埃及棉の最古最大の消費國であつて、特に然りである。英國は商業道德を嚴守する點に於て我實業界に定評あり、且つ我國各種產物を吸收する最大市場と認められてゐる。

五、一九三五年一月九日附英印通商協定に據り、英國政府は印度棉消費を増加する様あらゆる努力を拂ふことを約したのであるが、吾人の意見にては埃及棉と印度棉の用途には非常な相違があるから、前記協定は將來英國政府が一定量の埃及棉使用に保證を與へる場合決して矛盾することは無いと考へる。

六、英國に於ける埃及棉消費の減少はランカシアが現に蒙りつゝある不況に起因するのみである。ランカシアが以前の繁榮を取戻せば、埃及棉消費量が増加することは疑のない所である。

七、ランカシアの埃及棉部は、米棉部に比し日本製品競争の打撃が少かつた。今後ランカシアが高級綿布専門の政策を續行するならば、其埃及棉使用量は増加するであらう。

十五、埃及輸入綿布に對し割當制を採用し、英國に對し總輸入の五割三分、日本に對しては一割九分の輸入を許可することは恐らく競争を抑止し、其のため日本は勿論總ゆる産地より輸入する綿布價格を全面的に騰貴せしめるであらう。（之は埃及消費者の損失となる）。埃及消費者の購買力には制限あり、近き將來に於て購買力増進の見込はないから、價格騰貴は必ずや購買量の激減を招來するであらう。従つて割當制は所期の目的に反することとなる。更に割當制には行政上の重大なる困難を伴ひ絶対に迫られるに非ざれば、此制度の採用を躊躇せざるを得ない。

十六、幼稚なる埃及工業就中埃及棉の使用は年々増加し、此の優良棉花を以て製造せる良質の綿布を自國に供給し、且つ多數の農民に工業的訓練を與へる當國紡績及織布業を支持獎勵することは、埃及國民及政府の義務である。英國商工業巨頭連も本使節に對し埃及工業の發達は結局埃及國民の購買力増進を促すに相違なく、其の發達を喜ぶ旨を述べた。

十七、爲替低落國に對する附加税に關しては種々の批評あるも、本附加税は均衡を與へる理由で正當と認められる。事實爲替低落國の工業は、輸入國の工業に對する競争力を昂めるから、此特權に對し本附加税は公平なる相殺の役目をなすものである。埃及國に於て本附加税を賦課することは、國內織物に對し公平たる保護を與へることとなり、割當制の如き缺陷を生じない。此の附加税は更にランカシア製品に對し埃及に於ける其地盤を強化する機會を與へるものである。之は英國が埃及棉の重要市場なる以上、兩國國民の利害が一致するを以て、埃及としては望ましいことである。

十八、埃及政府が爲替補償税賦課を決定する場合（此附加税が一度び賦課せらるゝ以上は）日本に於ける一定數量の埃及棉花の賣行を保證し、一方日本に對しては日本製品の競争により埃及産綿布の受ける打撃を緩和する程度に定められた一定數量超過せざる日本綿布の輸入を保證すべき協定を締結する爲め、日本側と交渉の希望を有する旨政府として意思表示をなすのは當然であらう。中略

二十五、本使節は埃及國內産業及棉花生産を支持する公平な手段として、埃及棉にて製織したる織物に特惠關税を課することを政府に提案するものである。下略

右によりて何よりも明らかなることは、

（一）日本商品を驅逐するために爲替補償關税を追課せんとし、その前提として協定廢棄通告をなしたものである。

（二）日本商品を驅逐するのは、國內工業を保護するよりは、寧ろイギリス商品を擁護するた
めである。

（三）イギリス商品を擁護するのは、主として埃及棉花の將來をイギリス綿業の將來に期待するからである。

八、問題解決の試案

問題解決の根本方針としては、

（一）埃及國の立場において埃及經濟の發展を根本的に考慮し、それによつて吾國の商品市場を確保し、兩國の共存共榮を計ること。

（二）埃及國以外の第三國の利益のために、吾國の市場を犠牲に供することは、絶対に認むべ

からざることを。

(三) 埃及經濟繁榮の源泉は棉花にあるから、棉花買付を考慮することによつて、わが綿布市場を確保しうることを。

問題解決の具體的試案としては、

第一案 日英綿布の輸入割當制は、埃及のために吾國のためにも採るべきでない。さきに埃及の遣英經濟使節がイギリスに到るや、イギリス側は頻りに綿布及人絹の輸入割當制を採用すべきことを勸告した。而かもその内容たるや、イギリス植民地に施行したると全く同様に、一九二七——三一年を基準として、イギリス綿布五三%、日本一九%を主張するにあつた¹⁾。かくの如きはイギリスに最も有利な比率であつて、不合理も甚だしい。今もし割當制を採用すべしとせば、一九三四年の最近年度によるべきであり、然らば兩國の比率は逆に、イギリス綿布一九・八%、日本六八・二%でなければならぬ。かりに百歩を譲つて一九三二年——一九三四年の三ヶ年平均を基準とするも、イギリス二八・八%、日本五五・四%でなければならぬ。之は吾國としても忍び難き所であるが、イギリスとしては尙更に困難であらう。結局この案は日・英の間に一致點を見出し難きと同時に、埃及經濟にとつて最も不利である。何となれば安價な日本商品の閉出しによつて、多數の國民消費者を犠牲にするのみならず、高價なランカシア製品の輸入はそれほど増加せず、従つて期待する、ランカシアの埃及棉の輸入増加は實現されないからである。のみならず、

1) 外務省通報局日報、第192號。P. 123I. 埃及遣英經濟使節の復命書梗概書、(天城總領事報告)。

イギリスのこの要望は、完全な獨立國として關稅自主權を有する埃及國をもつて、全く植民地と同様の屬領扱ひをするものである。遣英經濟使節がイギリスのこの要望を斥けて、寧ろ爲替關稅策を採つたのは、この意味においては寔に賢明であつたと言はねばならぬ。

第二案 爲替補償關稅の撤廢または低減を要求するは至當である。最初に述べるが如く、少くとも現行協定の存續する限りは、爲替補償關稅は日埃協定の最惠國約款に違背する。けれども十月十八日の失効後は、それは問題でなくなる。四割追課が續く限りは、埃及の綿布關稅は七割以上となり、わが綿布にとつては殆んど禁止關稅に等しと言はれる。然らば之を埃及國の立場より見る時は、恰かも前の日英割當制と同じく、國民消費者を犠牲にし、而かも必ずしもイギリス綿布の輸入増加による埃及棉花の輸出増加を期待することは出来ないであらう。従つて遣英使節が割當制を斥けた理由は、直ちにもつて爲替補償關稅の排斥理由となるものである。たゞ實際には之を全く撤廢せしむることは、恐らく困難であらうから、或程度に之を低減せしむることが必要である。之に關聯して遣英使節の提案せる埃及棉使用の綿布に對する特惠關稅が問題となる。更にこの精神を延長せば、輸入埃及棉に相當するだけの綿布には、特惠關稅を許容すべきであり、吾國としては爲替關稅の一般的低減と共に、この種の特惠關稅をも考慮すべきである。

第三案 埃及棉花の輸入増加を計ることによつて、綿布輸出を確保する案にもまた、種々の具體案がありうる。

(一) 埃及棉花をイギリスと同じ程度に輸入することによつて、吾國の綿布をイギリス綿布と全く同様に待遇せしむることは、極めて合理的な要求であり、且つ埃及經濟のために最も有利な提案である。この案の難點は、吾國が果してそれだけの埃及棉花を消化しうるか否かにある。一九三四年の埃及棉花は、二百五十萬カンタール(二九・三%)をイギリスへ、八十九萬六千カンタール(二〇・八%)を吾國へ輸出してゐるから、吾國がおよそ昨年の三倍近くを輸入すれば、イギリスと同等の買付けをなすことになる、それは吾國に消化さるゝ棉花のおよそ一五%に過ぎないから、問題は技術上になく、要するに價格上の問題である。従つてこの價格上の差損さへ補償しうれば、必ずしも不可能の問題でない。この補償は主として埃及輸出の利益を割いて行はれねばならないが、その詳細な調査はまだ明らかでない。何れにせよ吾國としては研究に値する重要問題である。

(二) 吾國の綿布輸出を制限して、例へば一九三四年を限度とし、または一九三二——三四年平均を限度とし、之に對して埃及棉花の一定數量、例へば從來の最高數量またはその幾割増の輸入を保證する方法、すなはち日印協定におけると同じく棉花と綿布とを link する Barter system にもまた、種々の數字を考へうるであらう。

要するに問題解決の鍵は、何等かの方法によつて棉花輸入の維持または増加を計り、之に對して綿布壓迫の撤廢または緩和を交換的に要求するにあり、之によつて埃及經濟の繁榮と吾國輸出の維持を齎らし、兩國の共存共榮を實現せしめうるものと考へられる。(一〇・九・二五)